嶺呂

題字　浜名一雄

第45号　平成４年５月27日

発行者　群馬県山岳連盟
〒371　前橋市大手町１丁目１－１
群馬県庁観光課内
TEL　(0272)23－1111
編集　群馬岳連編集委員会
責任者　羽野順一
印刷所　森田印刷
〈定価　１部 100円〉

冬期サガルマータ南西壁に挑んで

登山隊長　八木原圀明

岳連の皆さんの絶大な御支援をいただきながら、創立五〇周年記念行事の一つとしての冬期サガルマータ（エベレスト）の南西壁登山を実施いたしましたが、力及ばず、荷上げ開始から数えますと、登山中止を決定して全隊員がBCへ下山するまでの八十三日間という長い登山に耐えたにもかかわらず、登頂を果たすことができませんでした。

十二月一日に登山を開始し、十六日には南西壁の核心部の黒々としたロックバンドの垂壁を突破し、最終キャンプであるC5地点（八三五〇㍍）に到達したため、「これで間違いなく登頂成功だ。冬期南西壁の初登攀は果たせる」と踏んだのであるが、二十一日のC5建設が強風と寒気により、テントのポールがポキポキと折れてしまい不首尾に終ると、その後はすっかり流れが変ってしまったかの如く、二度、三度のC5への到達もその上部のルート工作が強風などに阻まれて、とうとう年が明け、月が変り、二月九日に「登山中止」を決定せざるを得ないところまで追い込まれてしまったわけです。

総隊長以下十八名、約一億円近い資金をつぎこみ、先発隊員は出発から帰国までの五ヶ月間という長い期間の奮闘も空しかったということです。

大半の隊員は九一年春のシッキム側からのカンチェンジュンガ北東支稜登山にも参加しており、二つの登山を合わせると八ヶ月もインド、ネパールで生活していたことになります。

これらの二つの大きな登山はヒマラヤ登山経験の少ない若い会員にとっては、非常に有益な体験であり、今後の継続的な活動にとっては必ず役に立つと信じます。

登山は群馬岳連、スポーツニッポン新聞東京本社、上毛新聞社の三者による共催でした。

先発隊の佐藤、江塚、後藤は九一年十月一日の東京におけるスポニチ主催の壮行会の翌日の二日に成田を出発し、通関、デポ品の引き出し、装備、食糧等の購入、次々にカトマンズ入りする隊員の受け入れに当り、ネパール最大の祭・ダサイン中にもかかわらず、飛行機によるルクラへの輸送に当る。

先発隊員は仕事の合間にマウンテンフライトをし、後発隊はルクラ入り、シャンボチェ入りの際に行う。これは南西壁偵察や高い所の飛行中も酸素を使わないことにより、低酸素状態を経験させることを目的とした。

シェルパはサーダー・ラクパ・テンジン他二十五名、コック他八名の計三十三名を雇用する。

春のカンチ、夏のブロード・ピーク、ヌン、パミール三山の「プレ・サガルマータ登山」を実行した隊員達であったが、ペリチェの裏山（五〇九九㍍）やポカルデ・ピーク（五八〇六㍍）で高所順応訓練を行う。

十一月十一日から順次BC入りし、十七日に安全登山祈願祭を済ませると二十日から二十七日までは六〇〇〇㍍への順応を兼ねた荷上げを開始する。

BCからアイスフォールを越えてのCI（六〇二〇㍍）までのルート工作は韓国の南稜、東南稜二隊（両隊は十二月中旬に断念）と我が隊のシェルパがはしご、ロープ、スノーバー、スクリューピトンなどの器材を出し合って行う。

冬のアイスフォールの動きは非常に激しいため、毎日のように補修・整備をする必要があり、アイスフォール専門のシェルパも雇う。

十二月一日正式な登山開始。秋の終りから初冬にかけての天候は一年で最も安定している。その日のうちにCIを建設し、翌日にはC2（六五〇〇㍍）を建設し、その日のうちに南西壁へのルート工作に当る。

南西壁は思ったより雪が多く、しかも程良い硬さで登り易い。三日には軍艦岩下のC3地点に達し、五日にC3（六九〇〇㍍）を建設。テント台が残っていて助かる。

ピッチは上がり、名塚、佐藤、小西は四日間で二十三ピッチ（五〇〇㍍のロープ）の工作をしてC4地点（七六〇〇㍍）に到達し、十一日にC4建設。テント台一台を建て増ししてテント二張を立てる。

いよいよ南西壁の核心部への突入となる。雪はロックバンドの左端のクーロアールへつながり、頂上に至る線を結んでいる。

名塚パーティーがクーロアールの入口まで十七ピッチの工作をし、次いで尾形、後藤がクーロアールから垂壁を登る。

尾形は酸素ボンベをはずし、古いロープにユマールをセットして登る。十五～二〇㍍の垂壁を越すと岩屑ののったランペとなる。十六日にここまで達してしまう。C5はこの一ピッチ少々上である。

このスピードであれば登頂疑いなし、と思ったのであるが、二十一日にC5建設を強風により失敗するとBCへの撤退を余儀なくされ、一月一日からの再開後、八日、十五日と名塚、佐藤組、田辺、江塚組がC5に泊りながらもルートは伸ばせず、またBCまで全員が下る。

一月下旬からまた登り直し、C5の完全建設、登頂を試みるが、二十九日に橋本、小西、後藤、星野、秋山がC4からC5へ向うが、C5へは後藤、秋山が達し、橋本、星野がランペまで、小西は酸素器具故障でC4の少し上から下る。

この後、尾形、小田がC4へ入るがシェルパによる酸素の荷上げができずに下り、田辺、吉村のC5上のルート工作隊もC2から動けず、とうとう二月九日に登山中止を決めざるを得なくなった。

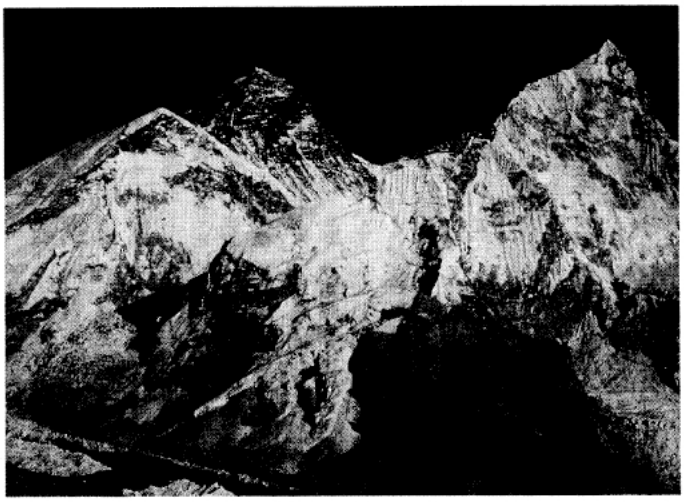
最後はシェルパにC5への荷上げを拒否され、彼等に引導を渡されるようなかたちで終ってしまう。名塚、佐藤のアタックメンバーはBCからの移動の機会さえ奪われて終った。

凍傷はシェルパ一名、隊員三名、シェルパの転落ケガ一名。

ゴミは自分達のものはもちろん、BC周辺に残されていた他隊のゴミもひろい集めて、ナムチェまでおろした。

報告

一、HAJ会報・ヒマラヤ二四七号
二、山と溪谷・六八二号
三、岩と雪・一五二号



サガルマータとヌプツェ

C5の建設

登攀隊長　名塚秀二

頂上を陥す為、再度BCより一月一日上部へ向う。

八日、八時過ぎになってようやく出発準備が整い、私、佐藤、小田の順でC5予定地へ向う。

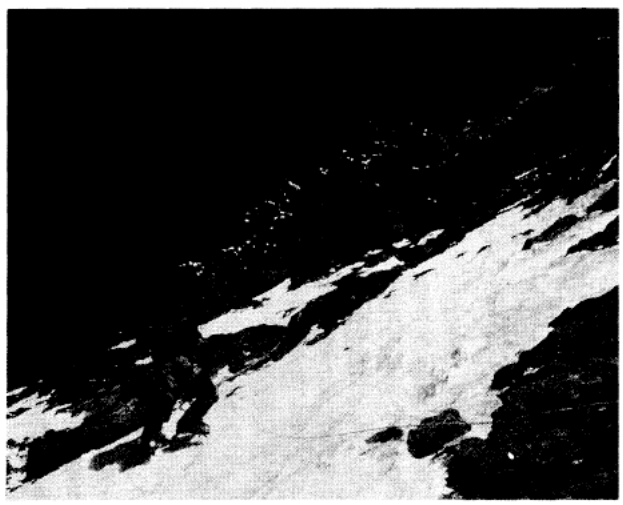
ほとんど風も無く、登山日和。しかし、酸素を吸っているとは言え、陽が当るまでは寒い。十時半頃、六ピッチ登った所で、ようやく太陽の恵みを受ける。佐藤、小田は二～三ピッチ下にいる。佐藤は、八五年秋に、このサガルマータに、小田は、九一年春に、カンチェジュンガ登頂者なので、私は二人の心配無しでピッチを上げて行く。

十一時頃になると、酸素を吸っているせいもあって、汗が一条の筋を描いて背中から落ちて行く。時々下の二人の様子を見ながら登っていたのだが、そんな時、二人が一緒になって何かやっている様子である。十分から十五分過ぎた頃一人が、下へ降りて行く。調子が悪くなったので下降したのかと思ったが、十二時の交信で、C2とコンタクトを取ってみると、小田がエコノマイザーから酸素マスクへ来ている。蛇腹ホースの中で水分が凍ってしまい、マスクとホースを取り外して、氷を砕いているうちに、マスクとのジョイントを落してしまったとの事。明日のルート工作に対して不安はあるが、とにかく今日は、何としてもC5建設をする為に、ユマーリングをし、高度を上げて行く。

クーロワール入口附近は、高度八二〇〇米あるのだが、雪質はザラメ状に近く、アイゼンが良く効かず、酷く体力を消耗する。

クーロアール入口より二ピッチで、この南西壁の核心部である。ロックバンドの乗越しとなる。以前開かれた残雪ロープが何本か垂れ下ってあり、我々の張ったフィックスと一緒に束ねて、二五米の垂壁を登る。上はランペとなり、途中三米の壁を乗越して、岩と雪のミックスしたリッジを半ピッチ登った所がC5予定地であった。

時間は二時半、尾形、後藤でC5を建設しようとして、テント場は整地されていたが、猫の額位しか無く、とても二人が横になって寝る事は出来そうもない。上を見ると、三〇米程上に段になった所があるので行ってみたが、整地をしてみると、下と同じで、すぐ岩が露出してしまい、他を捜してみるが無くて、元の場所へ戻る。その頃になって、佐藤と、荷上げに来たシェルパ二人が到着。シェルパは、荷物を置くと早々に下って行ってしまった。



南西壁の登攀

まずはデポ品の点検をする。テントは固定はしてあるが使えそうにない。今日再度上げたテントを使う事にする。酸素は、とりあえずルート工作する分はある。しかし、困った事に、二つあるはずのシュラフ一ヶと、日本食が風で飛ばされてしまったのか見あたらない。食料はツァンパ（日本で言う〝きなこ〟の様な物）があるだけだ。

四時の交信でC1の尾形へ報告する。尾形は、シュラフ一ヶしかないのは危険なので、今日のC5建設は諦めて、下へ降るように言われるが、今までの風を考えると、この次、またいつこのC5が建設出来るか、又、今日のこの風の穏やかさから、明日も同じ位の風で、ルート工作が出来るのではないかと考え、是非にお願いして、C5を建設させてもらう。

二人で再度整地をして、テントを張る（三分の一程は空中に飛び出しているが）中へもぐり込む。入ってみると、整地してフラットにしたつもりでも、コンロと、コッフェルを置くと、他は全て傾斜がついており、どっかりと腰を落ち着けて座る事が出来ない。

食事はツァンパを紅茶で練り上げて、水分と一緒に喉へ流し込んでしまう。食事が終ってしまうと他にする事もなく、ただ寝るだけ。

一つしかないシュラフのファスナーを全開にして二人の上から掛けるだけ。コンロが無くなると、またたく間に寒さが肌身に貫ぬいて来る。それでも、C4からの移動、C5建設と疲れていたので、一時間位はうとうと眠れたのだが、寒さで目が覚めてしまい、長くて寒い夜を過ごした。

翌九日、睡眠で酸素は吸ってはいたが、高度八三五〇米、そして寝不足のせいか体がだるく、尾形へ確認を取って、C2へ下らせてもらう事にした。

三回目の冬期登山を終えて

隊員　佐藤光由

スノーバーが欲しい。痛切に感じる。八〇〇〇㍍付近でのルート工作で、ハーケンを打つのは苦痛だ。

C4上部でのルート工作。前日初めてC4に入って見たボニントンのクーロアールは、異状に近く感じた。雪を縫って行けそうだ。だが、C4にあるスノーバーがあまりにも少なすぎた。我々名塚パーティは三日間でC5までのルート工作をする事が、至上命令だ。雪のルンゼを左右の岩場に支点を作るルート工作が始まった。

我々の世代は周知の通り、既成ルートを登る事がほとんどだ。谷川岳や、他の山でも、自分達でルートを作って登る事はやっていない。それでも、多少の自信はあるが、スピードは一向に上がらない。

今回のサガルマータ南西壁に、これほど雪が残っているとは思わなかった。もちろん、スノーバーはたくさん持って行ったが、主に、ハーケン、ボルト、アイススクリューを準備した。テントも失敗だ。頑丈なに固執したため、重量がかさみ、結局、自分達で設計したボックステントは使わず、軽い強化エスパースを使う事になった。計算違いではあるが、うれしい誤算である。しかしミスである事には間違いない。

アンナプルナ南壁でもそうであったが、南壁、南西壁を登るといっても、ほとんどルンゼ登りである。秋のルンゼは雪が多く、雪崩の危険があって難しい。サガルマータ南西壁の春は反対に雪が少なく、岩の露出で時間がかかってしまう。降雪のない十二月中旬までのプレ、ウインターだからこそ、登り易いルートであったのだ。そんな事を、多少わかっていながらも、南西壁の大きさに慎重かつ、怖れを抱きすぎた。

私の担当の装備も、失敗の要因の一つとなってしまった。スノーバーが不足だったのは、わずか一日だけだった。それでも、短期速攻登山には致命的だ。結局、我々名塚パーティは、C5までのルート工作はできなかった。遠征失敗の原因はたくさんある。隊員の力不足ももちろんだが、小さな事でも、一つ一つが失敗の要因になっていく。アンナプルナの一回目も同様だった。数々の要因が重なってくる。そして、それが知らず知らずのうちに大きな流れになってしまう。成功する時は、逆に成功の大きな流れができ、それから起こる小さな問題は、軽くクリアされてしまうものだ。その様にもっていくのが、そして、その微妙さが、遠征のおもしろさかもしれない。

失敗はしたが、今回は後藤をはじめ、若手がよく働いた。名塚さんや私、そして、力がある県外の人が動けるのはあたり前だ。そんな中で、群馬の若手が同等に動いた事に、十分な手答えを感じた。まだまだ群馬はいける。そう思う。これからも、岳連の人達の力を借りて、群馬岳連の海外登山をやっていきたいと思う。

登山隊の構成

総隊長・星野光　隊長・八木原圀明　副隊長・尾形好雄　登攀隊長・名塚秀二

隊員　吉田秀樹　橋本康弘　木村文江　田辺治　江塚進介　佐藤光由　小西浩文　小田隆三　後藤文明　星野龍史　松崎宣行　秋山剛　長久保豊（スポニチ記者）　吉村哲明（医師）

各部報告

氷壁技術講習会

二月二日、倉淵村（烏川支流・相間川）にて氷壁技術講習会が行われました。今年は暖冬の為、講習場所の選定に苦慮しておりましたところ、倉淵山岳会・原田氏に相間川を紹介して戴き無事講習会を行う事が出来ました。当日は、風が冷たかったものの快晴絶好の講習会日和となりました。今年は各山岳会への連絡が間際となり、参加者数が心配されましたが幸い指導員七名・参加者十九名・特別参加者二名・計二十八名、例年に無い参加者数となりました。参加山岳会名は、登高会・桐生山岳会・前橋山岳会・ミヤマ山岳会・太田山岳会・沼田山岳会・松井田山岳会・高体連・他高経大OB・JECC、でした。講習内容は、初級と中級に分かれ、二ヶ所の滝を利用しトップロープをセットしての訓練となりました。今年の初級者は六～七名（半数以上女性）でしたが、用具の説明、使用方法、ロープを付けない登下降、支点の作り方等行い、昼食後中級者に交じりトップロープを使用して登攀訓練を行った。中級者は講師の実技指導で登攀訓練を行ない午後三時講習会を終了しました。世間一般に女性の進出が目立つ昨今、山岳講習会に多くの女性が参加してくれることは喜ばしく又楽しみなことです。アイガー北壁ではこの冬地元の女性が単独登攀を短時間で行ったニュースも聞かれ、これからの女性登山家の活躍が期待されます。又今後とも指導委員会講習会への多くの参加をお願い致します。

《記安藤順一》

倉淵・相間川の氷壁

雪上生活技術講習会

三月八日、晴天に恵まれた谷川岳で雪上生活技術と山岳スキーの講習会が開催された。朝八時半に天神平のロープウェイ駅前を出発しシールを付けて田尻尾根の頭へ向かって登る。三〇分の登りで例年の講習場所へ到着。今年の参加は群馬登高会、群馬独峰会、太田山岳会、群馬むすびの会、松井田山岳会、沖電気山岳部、倉淵山岳会で講師を含め計十二名である。

今年は、マンネリ化したこの講習会を脱皮するため谷川岳山頂よりスキー滑降を取り入れ、また、文部省登山研修所の山岳スキー講習会に参加して得た技術の伝達も行った。最初に全員で弱層テストと雪崩発生後の救出方法を実習し、テレマウスを使用しての方法は口頭で行なった。その後は雪洞、イグルー設営班はこの場所近くで行い、谷川岳頂上へは先に登り出した者を含め五名が登頂し、三名がスキー滑降を行った。頂上からの大斜面は雄大であり、天神尾根のアイスバーンも少しゆるんだものの雪質は複雑である。熊穴沢も大きなデブリは無く、日陰側の新雪を上からの雪崩を気にしながら滑降し、西黒沢から整備した田尻沢コースを下降し二時三〇分に出合に到着した。来年度は雪洞イグルー班も熊穴小屋附近まで進出し、山スキー、ワカン登行の技術強化をしたいと思う。またスキー滑降技術については事前にゲレンデ講習を行う予定なので初心者も参加して下さい。

《記高田政美》

雪洞・イグルーの建設

海外登山研究会報告

昨年度の岳連会員の海外登山は春にプレ・サガルマータ登山としてカンチェンジュンガ北東支稜（日本ヒマラヤ協会隊）に名塚、佐藤、江塚、後藤、星野、秋山の六名が参加し、名塚ら六名（日印各三名）が登頂。

夏のブロード・ピークに小西らが登頂し、カンチを終えた江塚がパミール三山（コルジェネフスカヤ、コミュニズム、レーニン）に登頂し、松村がチョモランマ東稜（明大隊）、四川省のヤンモーロ（六〇六〇㍍）に挑んだ。日大隊）に挑んだ。

本年度の登山計画は夏に小西、秋山がガッシャブルムⅠ峰、秋には星野岳連会長の還暦登山としてチョー・オユー、シシャパンマ登山が予定されている。

冬期サガルマータ南西壁登山報告もされたが、これについては本号の別項を参照下さい。

役員改選があり、八木原委員長が退任し、名塚副委員長が新委員長に就任し、佐藤光由、後藤文明が新副委員長に就任。

八木原は一九七四年四月から五年間副委員長を務め、小暮勝義委員長のダウラギリⅠ峰南東稜での遭難後、七九年五月の就任以来七期十三年間の委員長在任であった。

退任に当り個人的な感想を少し述べさせて頂くと、足かけ二十三年間海外登山研究会と関り、十八年間副委員長、委員長として活動してきたが、宮崎勉元副委員長とも語ったことでもあるが「良い時代を生きた」ということである。

研究会の前身の群馬ヒマラヤ研究会発足直後からこの組織に入り、群馬初のダウラギリⅣ峰隊に参加し、失敗には終ったものの、今回のサガルマータ南西壁という超大物に、しかも冬に挑むまでになった海外登山研究会運営にたずさわれたことの幸せである。

一九六三年の関章司のバルトロカンリ以来、サガルマータ南西壁までの群馬岳連会員のヒマラヤやキリマンジェロなどの海外登山（アルプスは除く）は加盟山岳会独自の十四隊を含めて一〇九隊を数える。（拙著「氷壁に刻む」参照）

名塚新委員長のもと、益々研究会を中心としたヒマラヤ登山が隆盛し、躍進することを期待しつつ「長い間の御協力ありがとうございました」と御礼申し上げます。

《記八木原圀明》

遭難対策部

平成四年度 年間行事予定

三月二七日	結団式
五月十七日	隊員訓練（谷川岳）
七月　五日	隊員訓練（谷川岳）
九月　六日	隊員訓練
九月二七日	山田昇記念杯
十月二五日	県民登山大会
十二月十五日	冬山検討会
一月二六日	冬山報告会
二月二一日	隊員訓練（氷壁）

技術と信用で地域社会に貢献する
総合建設業
萬屋建設株式会社
取締役会長　星野　光
本社　群馬県沼田市下之町880番地　TEL 0278(23)4648(代表)
支店　東京都豊島区東池袋4－2－7　TEL 03－985－7631

GTE'92 インド・ヒマラヤ ストックカンリ遠征計画の概要

遠征隊隊長　日向野克己

このたび、群馬県山岳連盟の後援をいただき、インドヒマラヤへの遠征を行うことになりました。

群馬県高体連登山部顧問の係わる海外遠征としては、一九八〇年のインドヒマラヤCB53の登頂（初登頂・シャルミリと命名）一九八五年のインドカシミール・ガンガバル地方の踏査などがあり、今回は第三回目の企画となります。

目指すのは、インド北西部ジャム・カシミール州ラダックにあるストック山群の主峰ストックカンリ峰（六一五三米）です。この山は未踏峰ではありませんが、外国隊あるいは日本隊にも魅力ある山として知られ、レーから望む山容も美しく、登攀意欲をそそられる要素を備えています。

本隊の出発は、一九九二年七月二十三日の予定です。コースは、デリーから更に空路でラダックのレーまで飛び、この街で登山準備に入ります。

七月二十八日、レー発、ストック着後さらにマンカルモまで足をのばし、そこからBC予定地まで偵察。四八〇〇米地点にBC建設。八月一日からCIの工作。三日目の八月三日にアタック開始。第二次あるいは第三次までのアタックを予定しています。

BC撤収予定は八月八日。レーに引揚げ休養後、八月十日、レー～マナリ間の踏査に出発。

デプリン～タンラン・ラ（最高所五三一八米）～州境サルチュ～バララチャ・ラ（五一五〇米）モラン・ラ（四九〇〇米）を経由してセントラル・ラホール山群の山麓ジャスパへ。バーガ川、チャンドラ川に沿ってラホール山群を眺めつつ、最後の峠ロータン・パス（三九五五米）を越えてマナリ着。

登山基地ともいえるマナリで周辺の調査。マナリからはパンジャブ州チャンデイガールを経由し、パンジャブ平原を走ってデリーまで。

今回の特徴は、ストックカンリ峰の登頂とレー～マナリ間の踏査という少々欲張った計画にありますが、レー～マナリは最近解禁された軍用道路で、そうした意味でも魅力があると思われます。

私たち高体連登山部顧問は、日頃生徒の安全登山の指導を通じて、精神的にも技術的にも、夏には体力的にも、より高度なものを求めようと努力していますが、今度の遠征を通じてそれらが成就できることを願っているところです。

ヒマラヤという言葉の中には、はるかなものへの憧れというひびきがありますが、私たちはそれも大切にしたいと考えています。若い生徒たちをあらゆる面から教え導く立場にあるものとして、常にみずみずしい、精神的にも肉体的にも若さを感じさせる活動は必須であると思っています。

日頃のトレーニングのほかに、雪上技術訓練として、富士、八ヶ岳、足尾など、さらに文献を通じての座学、筑波大学における高所順応トレーニングなど、納得のゆく準備をということで頑張っているところです。実りある成果を持ち帰りたいと思っております。皆様の御理解と御協力の程をお願い致します。

登山講習会のお知らせ

群馬岳連指導委員会では加盟団体および一般登山者を対象に、技術講習会を開催しています。

読図講習会（机上）
期日　六月二十三日（火）二十八日（日）の二回
場所　群馬体協会館・山名丘陵
集合　午後六時三十分より
用意する物、赤、青、黒のボールペン、鉛筆、消しゴム、コンパス

登山教室
期日　九月～十月（未定）
一般登山に必要な知識と技術を実地山行で学ぶ。

氷壁技術講習会
期日　二月七日（日）
場所　吾妻郡六合村白砂川支流
集合　別途通知　午前七時十五分
用意する物　ヘルメット、ハーネス、アイスバイル二本（ピッケル一本）アイゼン、カラビナ三枚、シュリンゲ二本、その他。

雪上生活技術講習会
期日　三月七日（日）
場所　谷川岳天神平
集合　ロープウェイ天神平駅前、八時
用意する物　わかん、山スキー（シール）ストック、ピッケル、スコップ、雪ノコ、その他。

ロックフェスティバル
期日　十一月八日（日）
榛名山黒岩で、楽しく岩登りで遊ぶ。

指導員養成講習・研鑽会
各会のリーダーと指導員に、登山の資質向上として指導方法、実技訓練を行う。
期日　八月二十九日～三十日
場所　川場村桐ノ木平
用意する物　テキスト「高みへのステップ」登山指導教程、筆記用具、シルバーコンパス。
参加費　加盟団体、五〇〇円
一般　一〇〇〇円
申込み・問合せ
高田政美　高崎市寺尾町九二八
☎〇二七三―二六―四八九七

平成四年度 全国遭難対策協議会

登山における遭難事故を防止するため、山岳関係者により、山岳遭難の原因等について研究協議し今後の遭難対策の具体的施策に役立てる。

平成四年度の遭対協議会が、七月八日～九日、水上町「水上館」において開催される。主催は、文部省、環境庁、日本山岳協会、群馬岳連、その他である。

三つの分科会に分れ、中高年登山者の問題、救助体制と警察等の救助活動との連携、学校等の集団登山の安全対策の問題等、研究討議する予定。

多くの会員の参加を募っている。

平成四年度 自然保護委員総会

期日　10月17・18日（土・日）
会場　水上町去来荘
主催　(社)日本山岳協会
主管　群馬県山岳連盟
概要（第一日）講事と懇親会
（第二日）大峰山周辺を散策、湿原・モリアオガエルなどを観察する予定。

平成四年度 岳連救助隊員名簿

総隊長　西山年秋（沼田）
隊長　新井邦光（高崎）
副隊長　茂木　稔（独蜂）
小委員　小暮文彦（境町）
小沢　勝（独峰）
町田幸男（太田）
清水裕千（むすび）
大山洋次（境町）
隊員　見城正造（沼田）
柳沢　章（沼田）
小林利之（安中）
木村正巳（松井田）
神戸　誠（ミヤマ）
松崎宣行（ミヤマ）
江塚進介（伊勢崎）
中西和弘（伊勢崎）
高橋武行（伊勢崎）
矢内勝巳（大間々）
寺田　勉（太田）

理事　加藤藤夫（富士）
理事　松永幸雄（沼田）

県外講習会への参加

山岳スキー講習会（文部省登山研修所、緑崎山）
平成四年二月七日～十日
高田政美（登高会）安藤順一（登高会）
氷雪技術講習会（富士山）
平成四年三月二十日～二一日
鹿田雄三（高体連）阿部源（大間々山岳会）

ドリームボックス開店

二月二十三日「山とスキーの店石井」の新店舗（ドリーム・ボックス）の開店祝賀会が開催され、県内の多くの山岳関係者、スキー関係者が集まり、ジャズ・バンドの演奏もあり、お祭り気分で盛上った。「山とスキーの店石井」は、現岳連副会長の石井謙一郎氏が、昭和三十八年、岳連による県境縦走が行われた年に、新伊勢崎駅前に開店、山とスキーのブームを背景に、石井氏の独得な人柄と商法により、知る人ぞ知る専門店として充実してきた。ドリーム・ボックスの開店を機に、専門スタッフによるギヤ類の一層の充実を期待したい。

《記田島忠夫》

美と健康のお手伝い
ブリジストン自転車
ナショナル自転車
ホンダのオートバイ
一流メーカーは安心です
サイクルショップ ヤギハラ
前橋市下細井町139－3
TEL 0272－31－1308

有限会社 山とスキーの店 石井
DreamBOX
伊勢崎市宮子町78街区1819-1
TEL.0270-21-8025 FAX.0270-21-8026